区の木・区の花

墨田区の「区の木」は「さくら」、「区の花」が「つつじ」であることをご存知ですか。

これらは、区制30周年を機会に、区民の皆さんに愛され、親しまれ、また緑化のシンボルとしてもふさわしいものという意味合いで、公募により昭和52年9月に選ばれました。

まず、「さくら」ですが、区内には多くの桜の名所があります。なかでも墨堤の桜の花見には区内外から毎年多くの人々が訪れ、歌や俳句にも詠まれています。

こぎくらべ勝ちたる舟の旋風にちるや墨田の夕ざくら花　大和田建樹

隅田川花や散るらん漕ぐ舟の苫に色ある夕あらしかな　与謝野鉄幹

こうした歌や俳句は、どれを取り上げても、しみじみとした情趣に満ちており、花の名所墨田だと感慨を深くします。

さて、区内には、どのような種類の桜があるでしょうか。まず多いのが「染井吉野」で隅田・錦糸両公園など各所に見られます。江戸末期から明治初期にかけて、染井村（現在の豊島区駒込）の植木屋が吉野桜と呼んで新しく売り出したとされる新品種で、昔からある吉野山の桜―山桜とは違います。まぎらわしいので、後に「染井吉野」と名づけられた江戸っ子桜で、東京都の花にもなっています。葉の出る前に花が咲き、華麗であることから広く植えられました。

しかし、成長は早いが短命で、病気に弱いという欠点があります。本居宣長が「敷島の大和心を人問はば朝日に匂ふ山桜花」と歌に詠んで、その気品ある美しさで知られる山桜も隅田・錦糸町公園等に見られます。

しだれ桜、べにしだれ桜、里桜といろいろな種類がありますが、珍しいのは十月桜（春秋に花が咲く）や、寒緋桜（2月下旬から3月に咲く）などがあります。

ところで、向島が江戸第一の桜の名所となったのは、隅田川の清流と桜との調和ある美しさと、交通が不便な江戸の頃、船が使え、しかも都心からさして遠くないといった条件があったからだと考えられます。

一つ杭に繋ぎあいけり花見船　長谷川零余子

夕暮れの隅田川と桜

といった風情も珍しくなかったことでしょう。

墨堤の桜の植栽は四代将軍家綱に始まるともいわれますが、本格的には享保10年（1725）八代将軍吉宗の命によるものです。

そして、寛政2年（1790）、将軍家斉による桜の補填（ほてん）に始まり、向島百花園をつくった佐原鞠塢（きくう）が主唱して、当時の文人墨客により、白鬚神社付近に150本の八重桜を植えました。

ついで、天保2年（1831）には、名主坂田三七郎等により200本の桜が補填されました。

以来、墨堤の桜は幾度も洪水等により危機に見舞われましたが、そのたびに地元の人々の寄付を募り、桜を植え直し、今日に至っています。

近年では、平成16年（2004）に、区の「墨堤の桜の保全・創出事業」に賛同した皆さんの寄付によって、隅田公園に新たに桜が植えられ、平成19年に「平成植桜の碑」が建てられました。

一方、「区の花」の「つつじ」ですが、これも大変多くの種類があります。「さつき」などもつつじの仲間で花期が一番遅く、6月から7月にかけて咲きます。さつきとは五月のことですから、今の暦なら、なるほど花の咲く時期に当たります。

つつじ類は丈夫で、しかも群落となれば華麗であり、盆栽にすれば庶民的な美しさがあります。また、「おおむらさき」のように日陰でも咲くものや、さつきのように半日陰（はんひかげ）に育つものもあるなど、下町の横丁にも適し、街路樹としても最適です。

きりしまや葉一つなき真盛り　風生

区の花　つつじ

参考「社会教育だより」（発行　墨田区教育委員会）

【表面著者プロフィール】
安藤優一郎　氏
歴史家。文学博士（早稲田大学）
東京理科大学生涯学習センター、JR東日本大人の休日・ジパング倶楽部趣味の会などで講師を務める。